

鼓動の研究

大村伸一

*到着

列車は首都から北へ二時間走り続けた。窓は白くくもり夕暮れの景色は見えなかった。長い鉄橋を渡ると次は目的地だった。

向かいの席には子供が二人座りもっと北にある都市の話をしていた。大きな駅を幾つも止まらずに通過したのに、こんな小さな駅に停まるのが不思議だとも言っていた。車内アナウンスを聞いて片方の子供が窓のくもりを手で拭った。窓の外のプラットホームには何人もが待っていた。その全員が列車に乗り込んだのに、降りたのは私だけだった。思ったよりも寒くて腕にかけていたコートを着た。

予約していたホテルはすぐに見つかった。

「この町には初めていらっしゃいましたか」

フロントの女は宿泊カードを差し出してそう言った。

何か秘密を打ち明ける時のように顔を近づけ小さな声で、この町での売上がまったく伸びないのだと上司は言った。体臭を消す薬を使っているらしく、上司には何のにおいもなく、身体がすぐ横にあるのにそこには誰もいないように思えた。一日前のことだった。

フロントでは二週間を予約し毎朝商品が届くだろうと伝えた。無料の市内地図を貰い試供品の兎の小さな人形を渡した。かわいいと言いはしたが女は喜んでいるようには見えなかった。

部屋で荷物を解くと、あらかじめ作ってきた名簿を眺め地図と照らし合わせて訪問の順番を決めた。それに合わせてカバンの荷物を詰め直した。

翌朝は曇り空で寒さは少しましになった。ホテルを出る時、フロントに試供品の兎が置かれていた。二週間もすれば、町中の店先にこの兎が並ぶことになるだろう。もっと早くそうなるかもしれない。

*銀行

銀行の建物はありふれた民家だった。あらかじめ知らなければ銀行とは思わなかっただろう。口座を作りたいのだという男は何枚も書類を出した。

「ありがとうございます。この町には初めていらっしゃいましたか」

そう言いながら男は少しも笑顔を見せず記入箇所を次々と指差した。机が二つ並べられていてそれだけで部屋は一杯だった。尋ねると防犯のためですと答えた。

「乱暴な客も来るのですか」

「お客様はみな、市外からいらっしゃるので」

口座ができるまでの間、男と話をした。他には客は来なかった。

「この町ではお金が嫌われているのです。何も買おうとしないし、お金を稼ぐための仕事は見つからないでしょう」

「それで生活してゆくことができるのですか」

そう尋ねた時、口座ができましたといい男は机の一番下の抽斗から口座の証書を取り出し渡してくれた。私が試供品の兎の小さな人形を渡すと、横領になるので一旦は断ったが、取引の後だから横領にはならないし口座の開設では私に何の利益も生まれないというと、ようやく人形を受け取りその場で机の上に飾ってくれた。

握手をした手は冷たく、触れた途端思わず震えてしまった。私が失礼したと言うと、男は気にすることはありません初めてのお客様はみなそんなふうに震えるのですと答えた。

* 食堂

通りにはゴミ箱は見当たらなかったが、紙屑ひとつ落ちていなかった。小さな町とはいえ通りを歩く人影がまったくないのは、ゴミを出さないためなのだろうと思えた。

野菜や肉の腐ったようなにおいのする家が食堂だった。店の中はカウンターしかなく立ったまま食事をするようになっていて、一人が入るとそれで満員になった。品書きの一つだけで、それを頼むと小さな茶碗に盛られた肉と野菜のシチューが出てきた。シチューはやはり腐ったにおいがして口にに入れる気にはなれなかった。

「足りないものがあることにお気づきですか」

私はそう話し始めた。

店の主人は、茶碗の中を見て私がシチューに少しも口をつけていないと気づくと、答えた。

「空腹だろう」

私はカバンの中から取り出したものをカウンターに置いた。

「これを試してみてください」

その効果を見せるためにピンを茶碗の上で一振りし、それから私はその料理を平らげた。代金を払い、どうかこれを試してみてくださいともう一度言うと店を出た。

* 子供たち

子供は十七人いた。試供品の兎の人形を一人一人に手渡した。名前はすぐに記憶した。

施設の担当者は勝手に物を与えては困ると言ったが、無料ですと言うとそれ以上は拒まな

かった。

広い部屋に集められた子供達は兎に飽きても部屋から出てはいかなかった。他に何か貰えるのではないかと私のカバンを伺い、担当者の目を盗んでは私に近づいてきた。

ランプだと名乗った少年はもうすぐ誕生日なんだと申告した。そして部屋の隅に座って静かにしている少年を指差し、トルクは先週誕生日だったんだけどなにもプレゼントが貰えなくてずっと元気がないんだと教えてくれた。その言葉が、トルクに何かプレゼントをやってくれという友達思いなのか、それともプレゼントをくれなければ自分もあんなふうになってしまうぞという脅迫なのかはわからなかった。

私は試供品の紙テレビを置いて帰ることにした。紙テレビを壁に貼るとその前に子供達は群がり、始まったニュースを夢中になって見つめていた。

*夜の女

夜になると町は暗闇の中に隠れてしまった。街灯もなくホテルに戻るには地図だけが頼りだった。

ドアを開けると女が待っていた。赤やピンクで飾られた受付けはホテルのフロントとは似ていなかったから、私は道に迷ったのだろう。

「暖かいものはどうかしら」

女はメニューを広げて私に選ばせた。メニューに並べられているのは女の子の写真だった。

顔写真と全身の写真が隙間なく並べられていた。レストランではないようだった。

写真の服や髪型はそれぞれ違っていたがどれも同じ顔同じ体だった。一番やわらかい子にしてくれと言うと、女はみんな同じよと言って部屋の鍵を渡した。

「触って頂戴」

薄い生地のパイナップルの下着だけを着けた女が部屋の奥から現れ横に座って甘えた口調でそう言った。自分からは触れようとせず、ただ身体をくねらせ求めるような声で囁く。

「触って頂戴」

同じ言葉を正確に同じ調子で繰り返すので、横にいるその女は実物ではなく録画映像なのではないかと思った。確かめるために私は手を伸ばし女の腹に触ろうとした。

「触って頂戴」

女は腰をくねらせて私の手を胸の方へと導いた。胸には赤い星形の刺青があった。よく見れば星は刺青ではなく胸の中心に空いた穴だった。星に触れると指はそのまま胸の中に吸い込まれるように沈んだ。星の形に裂けた胸の中で私の指はすぐに冷たくなりかじかんだ。胸の奥で何かか餡のように指に絡みつき指を胸から抜くことはできなかった。どうしてこんなことをするのかと尋ねると、今度は女はただ気持ちがいいと高い声で訴えるだけだった。

部屋を出て出口に向かうと受付けの女が料金を書いた紙を渡した。

「少しも暖かくはなかった」

と言い指についた粘液を見せた。女は仕方ないわねと言って半額にしてくれた。私は割引にしてくれた礼だと言って試供品の兎の心臓を三つ渡した。表に出るとホテルは隣の建物だった。

* 子供たち

施設に近づくと子供たちが声を合わせてテレビテレビと叫んでいるのが聞こえた。紙テレビは三日で皺だらけになりもう何も映っていないのだろう。丁度、新番組の始まる時期だから子供たちはテレビのない生活にもう一分も耐えられなくなっているはずだ。私がドアを開けると子供たちだけでなく担当者も一緒に走り寄って来て、テレビが映らなくなったのだと訴えた。

この町に来て初めての売上げだった。今朝ホテルに届いたばかりのテレビを据え付け、二十余りのチャンネルを試聴できるように設定した。夕方までにはチャンネルの奪い合いが起きているだろう。

テレビを見ている子供たちの中にランプはいなかった。誕生日なので体の具合が悪いのだという。黄ばんだシーツの掛けられたベッドでランプは眠っていた。枕元には試供品の兎の人形がずらりと並べられていた。施設の責任者だという女はベッドの横の椅子に腰掛けていた。

「具合はどうですか」

「誕生日ですからね」

ランプはパジャマの上衣を脱がされそれでも汗をかき浅い息をしていた。見ていると鳩尾のあたりが紫色に変わっていて、膨れたり萎んだりを繰り返していた。

「医者と呼ばなくていいのですか」

「大丈夫です」

しばらくすると鳩尾の膨れは大きくなり萎まなくなった。紫色からどす黒い赤に変わり膨らみの中心で皮膚が裂け始める。やがて皮膚の裂け目が大きくなりその中から丸い塊が現れる。塊自体は薄い赤色の血に包まれ、外に出ようと身を振っているようにみえた。

「これは」

塊がぷるりと外に出るとそれまで塊に絡みついていた皮膚は胸に戻った。血はほとんど出ずランプの呼吸も穏やかに戻っていた。

「これは何ですか。寄生虫のようなものでしょうか」

危険なものかと思い取り除けようと伸ばした私の手を遮り、責任者は教えてくれた。

「心臓を見たことはありませんか」

確かにその塊は図鑑で見た心臓に似ていて、そう言われれば微かに鼓動をしているようにも

見えた。

「心臓がなくなつては生きていられないでしょう」

「心臓がなくても死ぬことはありません」

責任者の顔を見直したが、それは冗談ではないようだった。次第に心臓は乾きそれを包んでいた薄い膜が剥がれ心臓の下に大きく広がった。膜はまだ血液でぬれていて室内の灯りを受けて揺らめいた。心臓は一つの生き物のように息づいていた。乾いた膜は大きな翼となってゆっくりと羽ばたき始めた。子供の胸の上から部屋の中に心臓が浮かび上がると、責任者が立ち窓を開けた。心臓は羽根をゆっくりと羽ばたかせながら窓を通り抜け空に向かった。

「逃がしても良いのですか」

そう聞くと、責任者はそうするものだと答えた。

* 医者

聴診器を胸から離すと医者は、市外から来られたのですねと言った。どうして分かるのかと尋ねると、医者は理由はいくつもありますがと言った。

「たとえば心臓の鼓動は市外から来た人たちの特徴です」

そう言うと聴診器をアルコールで拭いて私に渡し、自分の胸の音を聞かせた。耳に聞こえるのは医師の肺が空気を濾過する音だけだった。私が理解するのを待って医者は、そうです心臓はないのですと言った。

「この町ではみんなそうです。この町で商売をしたいのなら、心臓を取ってしまうとよいでしょう。気持ちが分かるようになります。手術はいつでもできますよ」

私は丁寧に断った。商売は順調です。いつでもかまいませんよ。医者は私の胸から指をなかなか離そうとしなかった。

手を離してもらうために試供品のヤカンをその手に押し付けた。

「心臓の代わりにそれで血液を温めてはどうでしょう」

ヤカンに半ダースの固形燃料をつけると、ようやく医者は手を離してくれた。

* 食堂

今にも雨の降りそうな紫色の雲が町の上空を漂っていた。雨宿りののできる場所を探していると野菜や肉の腐ったにおいがする店に辿り着いた。店の前には客が二人も待っていた。店の主人は私に気がつくと手を拭きながら表に出て来て小声で話した。

「あるだけ売ってくれ」

置いて行った調味料が気に入ったようだった。十本渡すと来週また同じだけ持ってくるように依頼された。客に見えないように瓶を抱えて主人は店の中に戻った。

場所を詰めて三人が店の中に入ると雨が降り始めた。雨で窓がみるみる赤く変わってゆく。

こんなことがあるものだろうかと言うと、他の三人の客は水の入ったコップを高く掲げておめでとうと言った。

「おめでとう。おめでとう。誕生日おめでとう」

途中からは店の主人も声を合わせていた。近くの家々からもグラスを合わせる音とおめでとうの音が聞こえてきた。町中の人たちが、誰かの誕生日を祝っているようだ。

通りは血液の生臭いにおいでいっぱいになった。

* 夜の女

ホテルを出て隣の扉を開けるとピンクと赤で飾られた受付には前と同じ女が座っていた。入っても挨拶をしないのはひざの上にいる兎に餌をやっていたからだった。

「兎は好きですか」

「他の動物を飼ったことはないわ。兎の餌は何がいいのかしら。何をやっても食べようとしないの」

私はカバンから試供品の小さいニンジンの束を取り出して渡した。

「気に入ったら注文してください」

メニューを開くと女の子たちの写真に混じって兎の写真が何枚かあった。どの兎も同じ顔同じ体つきだったが、体毛の模様が違うので区別するのは簡単だ。兎には興味がなかったのもまた女の子を一人頼んだ。

* 子供たち

チャンネルを争って喧嘩をするのはまだ小さい子供たちだけだ。ランプもトルクの横で床に座ってぼんやりと床を見つめていた。誕生日おめでとうと声をかけると、静かな声でありがとうと答えた。

施設の責任者はテレビをあと五台注文した。子供たちの治療費よりもテレビの方が安くつくのだろう。テレビを沢山買ってもらえた御礼にと行って鳥かごを五個渡した。もうすぐ誕生日になるちいさな子供が五人いると聞いていたからだ。

「子供たちの胸を鳥かごで守れば心臓も逃げられないのではないのでしょうか」

頷くと責任者はテレビの前に座り込んでいる子供たちの頭から鳥かごをかぶせ、入り口の鍵を自分のポケットに隠した。子供たちはテレビに夢中で少しも嫌がりはしなかった。

* 医者

「ヤカンが目覚しい効果がありました」

医者はそう言ってヤカンの注ぎ口から自分の胸の星型の穴に血液を流し込んだ。

「こうすると、子供の頃に忘れてしまっていたものを思い出します。生きる希望というか、生

きることに意味があるのだと信じられる気分ですよ」

医者は町の何人かでヤカンの効果を確認したので、あと十個固形燃料を買いたいと言った。請求書の備考には医薬品と書いてくれとも頼まれた。患者にも広めてもらえるようにその場でヤカンを十個渡しそれぞれに試供品の固形燃料を五つつけた。

医者の中何かが動いていたが、医者は隠そうとしていたのでそれ以上覗き込むことはしなかった。

*夜の女たち

ピンクと赤で飾られた受付の机の上は小さな兎でいっぱいだった。

「ずいぶん殖えましたね」

と言うと女は

「みんな女の子なのにね」

と答えた。

メニューを見るともう人間の女の子の写真は一つもなく兎の顔とその体の写真だけになっていた。仕方がないので、あまりにおわないのを頼んだ。兎の胸にはやはり星型の穴が空いていたが、その奥には小さいけれども心臓があって、指を吸い込むようなことはなかった。料金は人間のときの十分の一だった。ニンジンには気に入ったようで、五十本のニンジンを渡すとそれまで眠っていた兎たちが起きだしてニンジンに群がった。

「毎朝、直接届けるようにしましょう」

頼んだわけではないのに受付の女は一月分を先に払った。

*子供たち

三十台のテレビが広い部屋の壁に沿ってぐるりと並べられていた。それぞれのテレビの前に一人の子供が座り画面の光を顔に浴びている。今日も新しいチャンネルについて聞かれるだろう。

胸に鳥籠を纏った子供はレンチとサウスだった。時間が近づいているのか、二人ともテレビから興味を失い、ただ床を見つめていた。責任者は姿を見せない。彼女の部屋からテレビの音が聞こえた。レンチとサウスをベッドの上に座らせると、心臓の動きが活発になった。心臓は身体の内側にいながら鳥籠の存在に気づいたらしく、胸を破って外に出ては来なかった。そのかわり、子供の身体の中を激しく動き回り出口を探しているのが分かった。レンチの心臓は口に狙いをつけて喉に上のほうに向かった。肺と喉の継ぎ目のあたりに膨らみができる。レンチの呼吸は止まった。膨らみは喉を上昇し口に達したが、子供の小さな口から外に出るには心臓は大きすぎた。レンチの顎がパリッとって壊れ、唾液にまみれた心臓が飛び出しシーツの上に落ちた。

サウスの心臓はもっと短い道を選びました。鳥籠の下に出ている臍の少し上に心臓は出口を求めた。サウスの口からは濁った血液とほとんど消化された食物がこぼれてシーツに落ちた。酸のにおいが部屋に満ちた。臍の少し上を破って現れた心臓は未消化の食べ物の上に落ちた。

こんなことになるのでは鳥籠は売れないだろう。私は二人の子供の死体をそのままにして帰った。新しいチャンネルが売れなかったことにホテルに戻ってから気づいた。

* 医師

「これが新しい心臓です」

そう言って医者机の上に出した心臓は潰れた球形で半分ずつ赤と青に塗り分けられている。

「色は、カスタマイズ可能です」

そう言っても医者は手にはしなかった。

「この形は赤血球です。心臓とは思えない」

「でも可愛いでしょう。誰にも分かりません」

まだ納得はしていないようだったが、新しい心臓を自分の胸の穴に押し込んで、その機能を確かめるため目を閉じ口笛を吹いた。大陸の奥地で生まれたその曲はこの町で聞いた初めての曲だった。

「問題はないようです」

曲が終わると医者はそういった。

「どれだけ外見が魅力的でも三百年も止まらない機械の心臓など誰も触れようとしません」

それから一時間、医者から聞いた意見を記録しホテルから本社に連絡した。

* 機械の心臓を売る

ピンクと赤で飾られた受付で、女はその心臓を見てカワイイと言った。部屋中に重なり合いゆっくりと動き回る兎がその声と同時に心臓の方を見た。私は代金を受け取ると、手を貸して心臓を胸の穴に詰めた。

料理店の主人は初めそんなものはいらないと言ったが、店に置いてくれば主人の分は無料にしても良いと言うとうなづいた。主人の胸の穴の大きさに合う心臓はカバンの中で一番大きいものだった。

部屋の灯りはすべて消されテレビの画面の輝きだけが窓を内側から光らせていた。責任者や職員の個室をまわり心臓を胸の奥に押し込んだ。テレビに夢中で何をされたかは分からなかっただろう。テレビとチャンネル使用料で十分に儲けさせてもらったので代金は半額にし

た。心臓のない子供たちには特に小型の心臓を与えた。まだ心臓のある小さな子供たちの場合は古い心臓と入れ替えなくてはならないが、往診を頼んだ医者結局来なかった。

ホテルに戻ると、部屋の前に長い行列ができていて順番を巡って殴り合う者もいた。彼らは心臓を受け取るとすぐその場で胸に押し込もうとする。部屋の中が飛び散った血液で汚れるので、次の日からはビニールシートを敷いた。

* 医者

左右の刑事に腕を固められ医者は連れ去られた。後に続く警官がヤカンと兎の人形を運んで行った。ヤカンの中には硬くなった心臓がこびりついていて、羽根を千切られていては逃げることができなかったのだろう。乾いた血液がヤカンの注ぎ口で固まっていた。

* 帰還

発売から三週間も経つと心臓の売り上げは急速に減った。町中の人たちが機械の心臓を手に入れてしまったのだろう。

それでもフロントの女はまだ心臓を入れていなかった。行列の対応に忙しかったのだと言う。私は最後の日にお礼としてステンレス製の心臓を贈った。ホテルのドアを出る時、清算の間湯煎して温めていた心臓を皿に載せ、奥の部屋に入って行く彼女が見えた。

プラットフォームで列車を待っているのは私と駅長だけだった。列車が止まると大勢が降り、乗ったのは私だけだった。向かいの席では子供が二人座り、もっと北にある都市の思い出を話していた。大きな駅を幾つも止まらずに通過したのに、こんな小さな駅に停まるのが不思議だとも言っていた。発車のアナウンスを聞いて片方の子供が窓のくもりを手で拭いた。プラットフォームで列車を見送った駅長がコートの胸のボタンをはずし、新しい心臓を胸の中に押し込んでいるのが、窓から見えた。